

令和7年度 第2回 明石市地域総合支援センター運営協議会 要旨

日 時	2026年（令和8年）2月12日（木） 14：00～15：30
場 所	明石市医師会館 多目的ホール
出席者	委員9名 傍聴者3名

開会	
議事（1）指定介護予防支援等一部委託事業所について	
事務局（市）	資料1に沿って説明
委員	③の山形県の事業所は、どんな関連があるのか。
事務局（市）	住民票が明石市にあって居所が山形県の場合、保険者は明石市である。山形県にいる本人のケアマネジメントができるのは山形県にある居宅介護支援事業所になるため、委託をするという形をとっている。
委員	山形県など他市にいる場合、介護サービスの利用には、何かあった場合に市の指示を待たないといけないなど、制限はあるのか。 また、明石市に住んでいたらサービスの対象になっていたことが、山形では受けられなかったとか、逆に山形では受けられるとかそういう違いはあるのか。
事務局（センター）	要支援1・2の認定の方は、住民票がある地域総合支援センターが担当するが、居所が他市にある場合には、地域総合支援センターと契約した上で、そちらのケアマネジャーに、一部委託している。 総合事業の訪問型サービスや通所型サービスになると、明石市の指定がある事業所でないと使えないが、デイケアであるとか福祉用具であるとか、全国的に使えるサービスもあるので、その場所で使えるサービスをケアマネジャーがプランを作って利用するという形になっている。総合事業にあたるものは制限がかかる部分がある可能性もある。
議事（2）令和7年度明石市地域総合支援センター事業報告書について	
会長	3センターずつで区切って進める。 3センターごとに質疑のみを受け付け、6センターすべての報告が終わってからご意見をいただく。
資料2に沿って東部3センターから説明	
委員	早期相談に繋がるために、様々な素敵な取り組みをされているなど率直に感じたが、そもそも、相談自体が地域総合支援センターへなかなかない。その原因や理由をどのようにとらえているかまず聞かせていただきたい。
にしあかし地域総合支援センター長	やはり周りから見て困っていらっしゃるのではないかなという方自身があまり困っているとは感じていない傾向にあると思っている。 しかし、いずれ困りごとを自分では解決できなくなる方も結構いらっしゃるので、地域で活動されている方はそういう方をキャッチしているというのが今回のアンケートで読み取れた。今回の内容は、気に

	<p>なっているけれども本人が困っているかどうかわからない方の相談をセンターにさせていただくことで、センターがどのように本人と関わっていくかを、地域メンバーと検討している。</p>
あさぎり地域総合支援センター長	<p>あさぎり・おおくら地区は2地区あり、特に大蔵地区に関しては、当センターまで地理的に距離もあるのが問題になっていると認識している。</p> <p>そのため、大蔵地区で毎月1回定期的にサテライト相談を実施して、それを広めていくことで、できる限り相談する機会を持てればと考えている。</p>
委員	<p>何かあった際の相談先は地域総合支援センターや明石市役所という話を職場でよくしているが、そもそも、地域総合支援センターの存在を知らない方が多いなという印象を受ける。日常生活ニーズ調査結果での認知度も、1割ぐらい、何かあったらそこに相談すると認識しておられる方も、肌感覚で1割ぐらいと、すごく少ないので、もっと、多くの方に知って欲しい。</p> <p>知った上で、何かあったらすぐ相談してもいいという気軽さも何か与えていただいたらもう少し相談件数も増えないかなと思うところもある。皆さんに知ってもらい取り組みとかを通じていただけたらよいと思う。</p>
委員	<p>大蔵中学校区の取組の中で、国の方で新しい認知症観という考え方が進んできて、理想的にはかなり素晴らしいが、実際に介護する家族の側は、こたえている。介護サービス事業は進んではいるが、夜はショートステイでもない限り、家族から見て認知症の方の対応はかなり厳しい状態もあり、家族が追い詰められているケースもあるのでその辺りの見極め方は難しいと思うが、やっていただきたいと思う。</p> <p>また、先ほどの質問と関連するが、皆さん、地域総合支援センターまで相談に行くというのはもう最後の手段という感じになってしまっている。自分の夫の親だから当たり前だといって、自己犠牲のもとで介護をしている方がおられる。本人から相談すれば良いじゃないかという考えもあるけれども、地域総合支援センターから一歩踏み入れたほうがいいのかと思う。</p>
会長	<p>まだまだ地域総合支援センターに行くのは、重たいというか、敷居が高いというか、専門職が介入することがすごくハードルの高いものになっているというふうに思う。</p> <p>だからこそ、自分たちから出向いてという話を最近されているのかなと思うので、そこも含めて、関わる機会を積極的に持っていかないといけないと思う。</p>
資料2に沿って西部3センターから説明	
委員	<p>高丘中学校の「もしもの時の備え方」プロジェクトのやってみてよかったというところで、既存の団体へ周知するだけでなく、幅広い世代が集まる団体への働きかけ、と言われている。</p> <p>これは先ほども言われていた、一般の住民の方が、地域総合支援センターを認知していないこととも関連すると思うが、既存の団体だけでも、毎年のように人が変わり、周知するのが大変だと思う。</p>

	<p>その上になおかつ、幅広い世代が集まる団体にアプローチをしようと思うと、体制的にも、手法も含めて抜本的に見直しをしないと、そう簡単な話ではないのではないかなというふうに思う。</p> <p>例えば、職員不足や時間外労働の制限なども要因になるかもしれない。いくつかの要因があると思うが、既存の団体のアプローチだとか、幅広い層へのアプローチをいかにやるべきなのかは、全体的に考えていただくとありがたいと思う。</p>
事務局(センター)	<p>人員体制については、行政で予算を一定確保している状況。</p> <p>国の言う地域包括支援センター基準数というのがあり、過去は1圏域で必要とされる基準数の体制だけで運営されており、各センター長がカウントされていなかった。数年前から、その基準数にプラス、マネジメントするのにセンター長が必要だろうということで、各センターに基準数プラスセンター長という形になっている。</p> <p>ただ実際、これは社協の問題であるが、職員が確保されていないとか、途中で退職されていくので、十分欠員を埋め切れていないのが1つ。もう1つは、明石市はさらに障害者や子どもまでと広くまるごと相談を受ける体制としているので、本当はもっともっと基準数以上の人員が必要。</p> <p>今行政に話し、その前にとりあえず定員揃えるように毎回言われており、そこを受けてからまた考えようという話になっている。</p> <p>また、地域総合支援センターが知られてないという話について、例えば夏祭りのイベントにブースを出させていただいている。別にそこで健康教育をする必要はないが、風船を配って、地域総合支援センターの名前を覚えてもらうという取り組みなどでもいいと思っている。あと、幅広い層にというところで先日からInstagramも始めた。幅広い層に訴えかける取り組みもしている。皆様の中でもこんなことをしたらとか、こんなところに来たら知ってもらえとか情報があれば教えていただけるとありがたい。</p>
委員	<p>どのぐらい相談件数があって、どういう経緯で相談が上がってきたのかというデータは取られているか。というのは、私は民生委員をしていて、いろいろ地域で支援を必要とする方と関わることが非常に多くて、その時にこちらからアプローチすれば、地域総合支援センターがまず本人に声をかけて、一緒に訪問して、相談事を受けるというようなことをよくやっている。しかし、自分は何とか頑張るということで、あまりそういう相談をしたくない方もおられるので、そういうところをどういうふうな形で掘り下げていくのかというのがあって、現状の数値みたいなのが、出せるのかなと。一生懸命頑張っておられると思うが、それぞれのセンターで年間どのぐらいその相談件数があって、それがどういう経緯で相談が入ってきたのか。また、本人やその家族の方が来られて相談されたのか、今言ったように民生委員とか、他の団体のメンバーから声がかかって一緒に相談を受けたとかいろいろケースがあると思うが、そういうデータを取られているのか。</p>
事務局(センター)	<p>相談が入れば全てシステムに記録を残している。大体、昨年度で延べで4万件ほどの相談を6センターで受けている。</p>

	<p>どのような方から相談が入ったかというところもすべて残るようになっていいる。本人や民生委員が、市の窓口へ行かれた場合、高齢者の介護の問題だとか、いろいろセンターの方で対応いただきたいということであればそちらの窓口の方から相談が入る。病院に入院中の方が介護になるということであれば病院の方からご相談いただいたり、いろいろな経路から相談を受けている。</p> <p>いろんな機関と連携しながら問題解決に取り組んでいる。</p> <p>経年で、今少しずつ、高齢者人口が増えてきているので、相談件数も上がってきているところではある。</p>
委員	<p>認知度を高めないといけないことを課題として挙げてこられるのは、今のような相談実績があって、その上で、どんな評価をされているのか。課題を解決するためにやろうとしているような地域も、イベントに関わりながら、できるだけ認知度を高めていくことが示されている。</p> <p>例えば専門者が何人いて、年間1人当たりどのぐらい関わったか、モデルケースとしてもう少し何かあったかとか、もう少し件数を増やさないといけないとか、需要と供給のマッチングができていないというところがあると思う。</p> <p>地域総合支援センターが関わりあって、一緒に支援をやっていただいてありがたいなと思っていが、高齢化もだんだん進んでいるし、いろんな需要が増えているのは全国的な傾向にあり、よく理解してはいるが、そういう中で当然人材の問題もあり、市の方も非常に理解していただいて対応していると聞いている。</p> <p>認知度を高めるためにはイベントに関わったりまでしないといけないのか、本来の専門職としての活動をどれだけ充実させていくかについて、どういう考え方を持っておられるのか。</p>
事務局(センター)	<p>センター職員が、認知度を上げていかないといけないと思っている根拠としては、重症化してからセンターにご相談されるケースがあるということ。もう少し早期から関わらせていただいた方が、本人の先の人生において、QOLの維持・向上や、選択肢の広がりというところもあるので、いろんなケースを見ている専門職として、もう少し早くから関わられるように、ご相談を受けられたらという思いがある。</p> <p>そのために、専門職としての活動に一番重点は置くが、地域の皆様に広く、顔を知っていただくという意味合いで、地域のイベントにも伺う活動も併せてさせていただいている。</p>
会長	<p>気をつけないといけないのは、早期から関わりたいという専門職がいて、実態として重度化しないと相談に来ないっていうのは、おそらく要因として、認知度がないからではなくて、専門職に関わってもらうことに対するハードルがすごく大きい部分もあると思う。</p> <p>もちろん、認知度もあるかもしれないが、決してその認知度を上げることだけが目的ではなくて、専門職として、できるだけ早いタイミングで関わるようにする。そのための1つの手段として、認知度を上げる。認知度を上げるために、地域の活動とかに顔を出す、というところがあると思うので、今の議論をずっとやっていくとただ認知度を</p>

	<p>上げることだけに行きかねない。そこだけは注意はしないとイケない。</p>
委員	<p>会長がおっしゃる通りで、民生委員とかいろいろな団体との連携や情報共有は、非常に大事だと思っている。ケアマネさんとかも含めて、もっと交流していくことによって、できるだけその地域の事情を拾い上げていくという、そこが肝かなと思っている。我々もそういうことにもっと関心を持って、センターさんと連携を深められたらなとは思っている。</p>
委員	<p>谷八木小学校区の取組について。</p> <p>以前私が物販のお仕事をしていた際に、チラシについて、高齢者の方が、「もう目が見えへんから見てないねん」と言われる方が多かった。実際にその年齢にならないと、どれくらい見えないのかわからないが、もう見ないで捨ててしまっている方もいて、私たちが思っている以上に、字が見えない、見にくくなっているというのが現状としてあるようだ。</p> <p>ましてや一人暮らしの人や認知症の方になると、アプローチをしていかないと、困ることがたくさんあるかと思う。私の自宅でも、民生委員の方が時々来られたり電話をいただいたりして、避難状況の確認など、いろいろお話してくださる。特に一人暮らしの高齢者の方、病气や難病を抱えている方には、チラシ配布だけでなく、人と人が、コミュニケーションを図る方がいいかなと思う。理解しづらい場合に、問い合わせまで、対応する人は少ないかなと思う。</p> <p>買い物や日常生活の中での困難とか、私のケースの場合、民生委員の方のように、直接その方に対応できる、コミュニケーションが図れるような人が行ってもらえたらなと思う。</p> <p>せっかくそういった困りごとに対して、対応を考えておられるので、周囲の方が直接コミュニケーションやアプローチをかけていけるような形の方がいいかなと思う。</p> <p>4つの校区があるということであれば、地域でエリアごとに分かれて、順番にアプローチをかけていくというのはどうか。</p> <p>大久保南（ゆりのき）の取組について、周りの方も含めて、みんなで高齢者の方に困難が生じないよう声をかけてもらって、何かあればセンターの方に繋いでいただくのはすごく良いと思う。</p> <p>また、私が生活している中で普段感じることだが、買い物に1人で行くと、届かないところに陳列しているお店がほとんどで、届かないからもう諦めて帰ってしまうことも結構ある。店員さんに声をかけてとってもらいなりすればいいのだが、店員さんもなかなか忙しそうにされている。そして声をかけるような店員さんがいないことのほうが多く、結局もう買わずに諦めて帰ることがあるが、そういった買い物のサポートで少しお手伝いをしてもらえるところなどがあっていいなと思う。</p> <p>実際に、車椅子で買い物に行ったことがあるが、そういうふう感じたことが何度もあったので、気にかけてもらえるとありがたいなと思う。</p>

	<p>一般の方でも、車椅子を止めてゴソゴソしていたら、何かお手伝いすることありませんかと声をかけていただくこともあったりするので、店員さんも、車椅子の方に特に気にかけてもらって、一声かけてもらえるといいと思う。</p> <p>私も、デイサービスで障害のある方同士でお話する機会があり、やはりこちらからはお願いしづらいところがあって、気をつかってしまうということがあるようだ。その気持ちは私もわかるので、周りの方も少し気にかけていただくと助かると思う。</p> <p>そういうふうに、お店の方も含めて、みんなで高齢者の方を、より安全に楽しく暮らせるように見守るのが一番いいかと思う。</p>
事務局(センター)	<p>相互の理解の場を増やしていかないといけないのかなと思っている。社会福祉協議会の取り組みとして、福祉学習の場も設けている。</p> <p>障害のある方に対しての理解を深めてもらう場を、例えば学校や、地区社協などで主催していただいて、そこに当事者の方にお越しただいて、声を聞いていただく。</p> <p>何かお困りなのかなというのをまず気づいてもらい、気づいたとしても、どう手を差し伸べていいのかわからないというところには、認知症の方の声かけ訓練とかもされている。様々な世代・属性の方が、話していく場というのをもっともっと社会福祉協議会として作っていきなと思っていますので、引き続きよろしくお願ひしたい。</p> <p>個別のケースは地域活動の場でやっていく、地域総合支援センターもそうだが社会福祉協議会としての本来業務なので、そのあたりは何かヒントがあれば、やっていきたいと思うので、1度またお話をお聞かせいただければと思う。</p>
会長	<p>今朝、他市の障害者の自立支援協議会に行っていたが、障害の方は合理的配慮について出てきていて、今どこもかしこも配慮となっている。学校に行くと、車椅子の学生とか、座る席がここのというのが指定されていて、でもその学生からしたらそこに座りたくないということもあり、配慮というものが、ある種確保されている安心感と、でも配慮を強制する必要性はないところもあったりする。配慮だけを押し進めるのではなくて、当事者の方が意見を表明できるとか、それを保障していく、それを考えていくことが大切である。</p> <p>だから学生とかはすごくわかりやすく、友達同士で車椅子の学生で車椅子が上に上がらなかつたら、肩組んで一緒に上がって、教室の人気の場所、後ろの端の方とかに座ってワイワイしている。やっぱりそういうような関係性が地域住民の中でもとれていくってことがすごく大切になってくる。そうすると困っていることとか、落ち着かない様子のおきに、大丈夫ですか一言声がかかけられるところにも繋がっていると思う。ぜひ何かそういう機会を、一緒に考えていくことが大切になってくるというのが、改めて思った。</p>
委員	<p>この認知症声かけ訓練で、随分前に、1人座っていただいて、声かけをするという訓練をした。なかなか、何を言っているのか、どう声をかけていいかわからなかったが、みんな最後には、3人ぐらいのグループで、上手だったやんとかああやって声かけたらよかったとか</p>

	<p>言いながら終わった。あれからしばらくなかったので、たびたび訓練がないと忘れてしまうので、できたら定期的にしていただきたいと思う。</p>
事務局(センター)	<p>地域によってニーズがあればというか、地域性によって行っているところもある。やはり1人歩きが多く発生してしまった地域とか、地域の皆さんがそれを学びたいと思ってくださっているような場合には、地域の皆様と相談しながら行っているところである。定期的にすることは今はやっていないが、住民の方からのそういう声があれば、開催させていただきたいと思う。</p>
事務局(センター)	<p>皆さんからこんな意見があったと職員に伝えるので、委員の方からもお声をお願いしたい。</p>
会長	<p>例えば避難訓練をあわせてやるとか、SOS だけでするよりかは、何かと合わせてやると良い。地区の中でそれぞれいろんな取組があるわけなので、そこに認知症の方ももちろん存在として当たり前になっているので、そういうところを活用していく。SOS の声かけではないにしても、認知症の方にどう声をかけていいのか、学ばないとわからないしやってみないとわからないし、学んだことが通用するとも限らないしというところがあると思うので、何かと合わせてやることをこれから考えてもいいのかなと思う。</p>
委員	<p>今、先生が仰ったとおりだと私も思う。</p> <p>それは健常者も含めて、困っている人にどう声をかけるかとか、隣の人にどういうふうに声をかけるかとか、どう働きかけの声かけをしたらいいかわからないというのは結構多い。だから、認知症の方々に対するアプローチの問題とか、そういうことではなくて、もっといろんな機会を通じて人と話をするという訓練をしていかないと、認知症の方だけとか障害者の方だけとか、そういうわけにはいかないと思う。だからそのあたりは認識をして取り組んでいただきたいと思う。</p>
会長	<p>あと、声をかけられるか。よく電車で、声をかけてどうぞって言ったらそんな年寄りじゃないと言われて怒られるというような、そういうこともある。声をかけられたから別にどうということではないので、聞き流していただくことも大切かなと思う。</p>
委員	<p>日ごろからこども財団の活動に支援ご協力いただき、感謝する。</p> <p>地域総合支援センターでは子どもも含めた、まるごと相談ができるということで、先ほど年間4万件の相談があるという報告だが、そのうち、子ども関連がどれぐらいの割合かということと、例えばそこからこどもセンターとか専門機関につないだものがどれぐらいの割合があるか、もしわかれば教えていただければありがたい。</p>
事務局(センター)	<p>どうしてもベースは地域包括支援センターになるので高齢者の方の介護についてのご相談が大半になっている。認知症の高齢者、精神疾患の息子さんで、少し気になるお孫さんというような、そういう複合的な課題を抱えられた世帯についてのご相談などの形で、子どもさんの相談が含まれたりする。そういう場合には、検診で関わっておら</p>

	<p>れる子どもの担当の方や、こどもセンターに相談する場合もある。様々な機関と連携しながら課題解決するようにしている。</p> <p>市からは重層的支援体制整備事業の委託も受けているので、多機関協働事業者として、そういう複合的な問題を抱えた方の、支援会議や重層会議と一緒にさせていただく形で、ネットワークを作って課題解決していく方向で活動している。</p> <p>子ども単体の相談はそれほど多くはない。</p>
会長	ヤングケアラーは、数的にはそんなにないか。
事務局（市）	<p>ヤングケアラーは共生社会推進課が事務局で、いろいろな部署が関わっている。福祉、子どもの関係の部署、学校、教育関係であったりというところで、少し難しいケースを抱えた子どもさんについては、それぞれ集まって支援のためにどうしていくかという会議をしている。明石市ではヤングケアラーの相談のダイヤルを設けており、これは特にヤングケアラーということに限ったことではないが、こどもセンターの相談電話番号ということで、その中でヤングケアラーの相談があれば、そちらを対応するというような形になっている。地域総合支援センターはその関わる中の一部ということで、市の方で対応している。</p>
会長	<p>明石市の場合こどもセンターがあつて、地域総合支援センターは子どもから高齢者までと言われたときのその子どもも重なってくる。重複するときに、もちろん専門職同士なので、相談があつて、どちらが適切に処理するべきなのか、介入していくべきなのかは、差配されているとは思いますが、結局どちらに相談していいかわからない状況が生まれかねない。そういうところでこぼれ落ちる子どもたちがいないようにしないといけない。この4万件の中のこどもの方も、たぶんそういったことも含めてかなと思う。</p>
委員	<p>障害者それから高齢者という線を引かなくても、例えば、視覚障がいの方が道を歩いていたら、その階段を上りきるまで何となく目がいつてちゃんと行けるかなって見守ってしまう。そういう、誰しもが何か手を貸したほうがいいのかと思えるところの気持ちを醸成していくことが、本当に大事なんだなと改めて思った。</p> <p>それから、福祉地域の総合支援に関していろんな業種の方が関わっているということが、セーフティネットになるのだろうけれども、やはり、どういった方々が連携して、情報が複雑になったり、届くべき情報が届かなくて数で見たらこんなにいたんだっていうような、そういったところがあるなと思う。例えば、先ほど一番最初の明舞の報告をいただいたときに、その住民の層や、健康相談、閉じこもり層の発掘、課題が、どのように数字で把握されているのかなというところがある。</p> <p>先ほど委員が質問を投げかけられたことも、どのような手助けが必要な方がいて、例えば生活の困窮度や困り具合はどこにどれぐらいどのような地域にどんな年齢層でとか、そういうフィルターでどうするか考えるのも1つ動機づけられる大きな材料になると思う。取り組んだことというのはよくわかるが、もう少し取組の背景になった実情を</p>

	<p>データで出された方が良いのではないかと。質問されている方もそのようなことを質問されているのではないのかと思う。</p> <p>話は逸れるかもしれないが、やはり看護職員でも、合理的配慮を必要とする、いろんな障害を抱えながら仕事をされている方もいるので、どの世の中にでも、そういう方々と、患者さんの安全性を図りながら、一緒に働いていく、そういう社会を作っていくといけないのは、どの世界も同じだなと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>まず1つは実践を分析していくということは、非常に重要な視点になるかなと思う。</p> <p>実際どこから相談が来ている割合が多いのか、それによって、今後専門職としてアプローチをかける場所がある程度定まってくる。ここにとりあえず重点を置いてみようというような、ある種のあたりがわかるところが出てくる。あるいは、地域性というところも出てくるので、分析をするためにデータをそろえるというのはすごく大切な事だと思う。</p> <p>ただ、1次データだけを、例えば相談件数が4万件という報告をされたときに、その4万件が果たして多いのか少ないのかというところは誰もわからないところで、来年度に4万件より少なかったら、どうだという話になってくる。では4万件から増やすことがいいとされるのか。でも増えるというのは困っている方がただ増えているだけ。そういう地域を目指すのかということになってくるので、いわゆる1次データだけを見て判断するのではなくて、そこを分析した結果で議論していかないといけないところがある。</p> <p>だからそういう意味では今、本当はデータを分析できる人が必要だが、社会福祉の人はその辺が苦手という意見が多い。なかなかデータ分析まで行きつけないところがあるが、個人情報の部分を抜いて、AIに食べさせれば出してくれるので、それが自分の専門職として普段関わっている実践の経験や勘と合っているかどうかの判断をしないといけない。要するにAIがやったから正しいではなくて、そこに対して、実際の間があるかと思う。</p> <p>また気を付けないといけないのは、個人情報が入ってしまっている時に、例えば某社だったら吸いあげてしまおうとか、オープンAIだったら吸い上げないとか、有料無料が変わってくるとか、いろんなパターンがあるので、そこを理解した上で、ICT機器を使っていくところも必要になってくるのではないかなと思う。</p> <p>そこを考えると、おそらくこれからこの業界も人員不足になってくると思うので、それをどう賄うかというときにAIを使っていくのが1つの選択肢として持っていないといけないところもあるのではないかな。</p> <p>だからといってこれが正しいわけではなくて、現場で関わっている人間が最終判断をしないといけないところがある。やっぱり最後は「人」なので、それは日頃関わっている専門職の皆さんが判断をしていくところにその重要性や大切さがあり、だからこの仕事ってなくならないというところはいえるのかなと思う。ぜひそういう風に考えて</p>

	いただければと思う。
その他、事務局（市）からの連絡	
閉会	